

顔も売ります！ やっちら本町笑店街

～八代本町一丁目商店街の笑いへの取り組み～

『モノを売るだけでなく、ヒトも売る』。ちょっとドキッとするような言葉だが、この言葉で商店街の店主たちは奮起した。お客の減少、大型店舗の進出、空き店舗が目立つアーケード、その危機を乗り越えるため、八代市本町一丁目商店街の店主たちが劇団を結成して、その〈顔〉を売ろうというのだ。しかも、お笑いで！

「笑い」は何より人々を楽しくさせ、幸せを運ぶ。芝居はまったくの素人13人が挑戦したお笑い劇団の名は『やっちら本町笑店街』。

劇団旗揚げに託した店主たちの思い、笑いに挑んだユニークな商店街の取り組みに新しい活性化のカタチが見えてくる。



劇団やっちら本町笑店街公演（今年3月）



長江政弘さん
(本町一丁目商店街振興組合専務理事)

商売に笑顔は大事！ 八代本町一丁目の店主たちが挑んだ 劇団『やっちろ笑店街』

郊外型の大型店舗の進出は、それまでの人の流れを変えてしまう。熊本各地、古くから町の中心として栄えた商店街の多くがその悩みを抱え、減少する人通りを実感している。八代市の本町商店街もその一つ。昨年暮れに八代市郊外に大型ショッピングセンターが開店、さらに今年6月にはもう1店、大型店舗が出店する予定で、八代市の商圈はにわかには色めき立っている。また、期待をかけていた九州新幹線の効果もいまいち。商店街はますます苦戦を強いられようとしている。

本町アーケードとして市民に親しまれている商店街には空き店舗が目立つ。本町一丁目だけでも十数軒、数億をかけた新しいアーケードの初々しさの下、空き店舗の文字がなんとも寂しい。

そんな中、本町一丁目商店街の店主たちで組織する本町一丁目商店街振興組合のメンバーが空洞化する商店街への危機感を募らせ、商店街活性化へ向けて立ち上がった。商店街の空き店舗を利用したイベントはできないかと模索するうち、思いついたのが演劇だった。13人の店主たちで結成された劇団は、その名も『やっちろ本町笑店街』。その名の通り「お笑い」で商店街の活性化を目ざそうというのである。客商売とはいえ、商店街の店主たちは皆さん演劇はズブの素人、店主たちが企てた劇団による活性化とは一体、どんなものなのか？「笑い」に託した店主たちの思いとは？今まで聞いたこともない新しい形の商店街の取り組みにKUMAKEN取材班も興味津々。

今回、KUMAKENの取材でたびたびお世話になっている(株)園川組の代表取締役社長園川忠助さんの紹介で、本町一丁目商店街振興組合の専務理事・長江政弘さん（長江美巧堂・45歳）を訪ねた。



本町1丁目商店街



長江政弘さん



公演をした空店舗

取材班 Q：商店街の活性化へ向けての取り組みで劇団結成とは驚きました。『やっちら本町笑店街』結成のキッカケは？

長江さん A：本町一丁目商店街振興組合の江上理事長の発案です。
「商店街はモノを売るだけでなく、ヒトも売る」その発想で店主みんなで演劇に挑戦しようということになったんです。元々、本町商店街を活性化させようということで、空き店舗を利用したイベントを開催したいと考えていたこともあり、劇団を結成しようということになりました。

取材班 Q：「ヒトを売る」?!面白い発想ですね。

長江さん A：店主の「顔」も商品なんです。顔を覚えてもらえれば、声もかけてもらえる。マスクミに登場することも「顔」を売ることなんです。

取材班 Q：まさに顔の見える商店街ですね。

「笑店街」ということは、お笑い？

長江さん A：「お笑い」は今、ブームということもあるのですが、商売には〈笑顔〉が大事ということなんです。

それに、自分たちが楽しまないと見る人も楽しくないと思うのです。お客さんに楽しんでもらえることをとすることで、やってみようということになりました。

取材班 Q：劇団結成は？

長江さん A：まずは、昨年10月、商店街の皆さん7人で「劇団河童塾」を結成し、県民文化祭のオープニングで舞台に立ちました。



顔見せ興行のチラシ



3月公演時の空き店舗を利用した劇場



それを母体に『やっちろ本町笑店街』が立ち上がりました。劇団結成に集まったのは、鮮魚店、電器店、鍼灸院などの店主13人。

1月10日の第1回顔見せ興行を目ざして稽古をはじめました。

なにせ全員が演劇初体験なので、脚本・演出をプロにお願いをして指導していただきましたが、出演・スタッフ全員で13人、衣装や美術は手づくり、すべて自分たちで揃えました。練習は週1回から12月に入って週2回、間近にせまるとほぼ毎日練習しましたね。



公演が終わって…

『やっちろ本町笑店街』のメンバーは13人、平均年齢40代後半。メンバーにはそれぞれに芸名があり、これがユーモアたっぷり！例えば、陶器店の泉屋さんの店主は「皿 茶碗」、木田鮮魚店の店主は「鮎川 海老蔵」、鍼灸院店主は「はり・キュー太郎」と言った具合。

ちなみに、長江さんの芸名を見ると「眼宝時 太鼓之進」とある。長江さんのお店は眼鏡・時計店。趣味でロックバンドのドラムを叩かれていることからこの名が付いたそうで、旗揚げ公演では音響・照明を担当した。なるほど、芸名を見るだけで誰がどのお店の方か一目瞭然。

顔見せ興行の演目は『そら よかばい ～八福神が本町にやってくる』。(脚本・演出 堀田博暉) 指宿旅行から帰る八代の七福神が肥薩おれんじ鉄道の車中で貧乏神と乗り合わせたことから起こる騒動を描いたもの。セリフはすべて八代弁の方言劇である。

さて、空き店舗に舞台を設置して行われた1月の『やっちろ本町笑店街』の旗揚げはいかがなものだったのだろうか。

取材班 Q：そして、顔見せ興行はいかがでした？

長江さん A：3日公演で1回の定員は50人。そこに70～80人が詰めかけ大成功でした。

その後、3月13日九州新幹線開業1周年記念日に2回目の公演を行いました。これも大成功でした。

取材班 Q：メンバーの公演後の感想は？

長江さん A：とても面白かったですね。「0」から創っていくことは楽しいものです。一度、笑いを

取ると快感を感じるようになっていくなです。メンバーも徐々に余裕が出てきてアドリブが出るほどになりましたが、同時に「笑い」の奥の深さを感じましたね。笑いをとるのは難しいですね。

取材班 Q：ちなみに費用は？

長江さん A：費用は全部で150万円程かかりましたね。

すぐに商売に結びつくわけではなく 話題をつくっていくことが劇団の役目 夢は常設館をもつこと

取材班 Q：2回の公演、お客さんの反応は？

長江さん A：観客の皆さんも店主の心意気を感じ取ってくれたと思います。劇団は、すぐに活性化に結びつく訳ではありません。「見たよ。出とったね。楽しかった。」などと声をかけてくれると、それだけでお客さんとの距離が近くなるんです。ひいては、それが商売につながっていくと思います。

取材班 Q：『やっちろ本町笑店街』大成功のスタートでしたが、これからの活動は？

長江さん A：劇団の目的は話題をつくっていくこと。それがヒトを売ることなんです。仕事が終わると飲みに行っていた時間を劇団に充てる訳ですから時間はあります。これからもいろんなアイデアでオリジナルを創作していきたいと思っています。子供向けの公演、映像劇などを予定しています。夢は劇団の常設館をつくることですね。

長江さんのインタビューに答える声も楽しそうだ。劇団のもつパワーや店主たちの未知なるものへの挑戦する心意気が伝わってくる。多分、1年前までは、店主たちは皆、自分達が舞台にあがるなど、こんなことが振興組合で起こるなど夢にも思わなかったに違いない。そこに達するまでの「面白がり方」は、私たちも見習うべきであろう。

劇団結成に託した店主たちの思いは、お客さんに本町商店街に来て楽しんでもらうこと。店主のたちの「もう一つの顔」が話題になれば、店主の顔も売れ、お客さんとのコミュニケーションが広がっていく。そうした循環が定着することで昔ながらの商店街の活きの良さ、地域ならではの人と人とのふれあいが取り戻せる。元来、商店街とはそういう心の通う路だったのではないだろうか。

本町一丁目に商店街本来の、ふれあう声飛び交う日まで劇団『やっちろ本町笑店街』の笑いへの挑戦は続くのである。店主たちの皆さん、頑張れ！